

## 松陰の妹文と八重の周辺 前篇

二七回生 林 裕三

### 一. はじめに

今年のNHKの大河ドラマは「花燃ゆ」で長州の吉田松陰の妹文を、一昨年の「八重の桜」は会津藩大砲隊山本覚馬の妹八重をそれぞれ主人公にしたドラマである。いずれも幕末で視点が違ふし、登場人が重なってくるのでさらに面白い。会津藩関係者、新島に関することは前号 前々号に詳しいので重要な部分のみ記すが、誌面の都合で文の夫久坂玄瑞、文、八重の夫新島襄および八重については次号に記載する。

### 二. 会津藩士 山本覚馬

山本覚馬は会津藩砲術師山本権八の長男として1828年(文政11)鶴ヶ城近くで生まれ、2年後つまり1830年(天保1)吉田松陰は長州藩士杉百合之助の次男として生まれる。この間つまり1829年(文政12)に後に松陰の妹寿(文の姉)の夫となる小田村伊之助(後の楯取素彦)が生まれる。この三人に言える

ことは20代前半で1、2回江戸に遊学し、30歳前後で藩校の教授となって後進を育てることである。それにこの時代の青年は夫々、嘆願書をその都度まとめ自分の考えを藩政の改革に活かそうとしたことだ。

まずは同世代のこの3人について記載する。覚馬は1850年(嘉永3)22歳の時、江戸へ出て武田斐三郎、勝海舟らと佐久間象山塾に入る。象山塾からは後から出てくる吉田松陰、河井継之助らが輩出する。1853年(嘉永6)再び江戸へ出て、江川太郎左衛門に師事し象山海舟を訪ね洋式砲術の研究に大木塾で従事する。嘉永6年と言えればペルーが率いる黒船が浦賀に現れた年である。

なんとことあるうに象山門下生 松陰が密航を企て象山自身も伝馬町の獄に囚われた。覚馬は松陰ほど幕府の政策には怒っていた記録はなく、それ以上に欧米列強との国力技術の差を見せ付けられます。まずまず西洋兵学に打ち込んだ。3年後つまり1856年(安政3)会津に帰り、藩校日新館の教授となる。その年日新館の中に蘭学所を設けこの教授も兼ねた。28歳のときのことである。当時の会津藩は槍刀が主流で鉄砲と言っても火縄銃である。雨天では使えない火縄銃を

廃止し洋式銃を採用する砲術など兵制の改革を唱え過ぎた為、禁足を食らう。この時代の武士は嘆願書を直ぐまとめたと述べたが、覚馬は藩候以外にも鳥羽伏見の戦いの折、薩摩藩に捕まり幽閉された二本松薩摩藩邸でまとめた「管見」建白書が薩摩藩に提出され明治政府の施策となり京都府勧業嘱託となって京都の近代化に尽くした。

### 三. 長州藩士 小田村伊之助(楯取素彦)

一方長州では松陰の妹 寿を妻にする小田村伊之助(後の楯取素彦)は萩藩医 松島瑞幡の次男として萩に生まれる。幼名は条次郎。11歳の時 藩校明倫館の儒官 小田村吉平の養子となり、養父没後小田村家の家督を継ぎ、1847年(弘化4)18歳の時 明倫館の助講となる。当時長州では藩外での遊学・武者修行を奨励していたので、伊之助も1850年(嘉永3)21歳の時大番役となり江戸にて遊学を許される。朱子学者として高名な安積良斎や佐藤一斎から師事を受け、この時期吉田松陰も講義を受けている。参考までに桂小五郎は伊之助の4歳年下で明倫館で伊之助に師事、松下村塾で3歳年上の松陰から兵学を学んでいる。

1853年(嘉永6)24歳の時、3年間の遊学を終えて帰国するが、2年間は松陰と一緒に学んでいて友好を深める。伊之助が去った後、ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀に入港した。つまり会津藩の山本覚馬と同時に江戸を離れている。伊之助は萩に戻り明倫館に復職し松陰の妹 寿と結婚する。同じ年に再び江戸勤務を命じられ2年後帰藩し明倫館講師見習を再勤する。しかしまた1年後つまり1856年(安政3)長州藩は三浦半島の防備の幕命を受けたので伊之助はその陣屋へ赴任のため萩を離れる。結婚したものの子供が出来たにも拘わらず殆ど一緒に生活できず、妻寿は子供と共に杉の実家の世話になる。度々明倫館を離れることに伊之助は重苦しく感じていたが、松陰は明倫館と同様 海防の任務も大事と激励している。1857年(安政4)帰国後、明倫館講師本役となり翌年藩公の侍講(こころ 藩公に儒書を講じる人)になりながら明倫館も三田尻越氏塾御用掛も兼ね、この頃の伊之助は多忙を極め1861年(文久1)藩公の側近として江戸行きに随行している。32歳の時である。伊之助はこのように藩政に携わっていたこともあって、松下村塾を陰で支えていたし松陰には理解されていたが、



怒り立つ塾生を抑えることが多く、塾生には理解されていなかったというよりも煙たがられていたと思う。それ故、明治になって中央官庁でなく、山口県からも遠い群馬と言う地方に追いやられたこともあって松陰や後に出てくる高杉晋作、久坂玄瑞や桂小五郎などの塾生に較べて伊之助は名前が知られていないのだ。良い意味でもうひとつ付け加えるならば、伊之助は坂本龍馬の要請を受け薩長同盟を成立させるために桂小五郎との端緒役を務めている。

1867年(慶応3)9月藩命により楢取素彦と改名後、懸命に藩事に務め、参内し敬親(「七卿落ち」の時慶親から改名)父子の官位復旧と五卿含めて入京許可のお沙汰が下知された。1863年(文久3)8月18日所謂「七卿落ち」で、長州人は入京も許されなかったのが、死んだ玄瑞が願っていた赦免嘆願がやつと認められたのだ。明治政府の参与として最も早く任命されたのは楢取素彦、井上馨と広沢兵助で、その後、木戸孝允、伊藤博文が参与に任じている。

藩主敬親の側で藩政を支えて来た素彦は1871年(明治4)3月下旬、毛利敬親候逝去後一時引退するも、地方官として足利県に出仕し、群馬県令(今の知事)

になる。これは長州の重鎮である木戸孝允らは先輩であり、元藩主に可愛がられた素彦を萩の乱の首謀者である前原一誠から、山口県政から遠避けたからだ。

群馬県令となった素彦は道徳を重視した教育県として、また産業支援を次々遂行する。戦前最後の首相となつた鈴木貫太郎の父、由哲は千葉県から子供教育のためだけになく、失業士族を県庁他養蚕製糸会社へ就職斡旋により家族で移住して来たし、ユネスコ世界遺産として登録された富岡製糸場は倒産しかけたときに素彦が支援した事が大きい。また、英語を習得した製糸会社の若い経営者に米国に直輸出、勧めるべく渡米を渡している。渡米が叶わなかった松陰の夢を託したのである。この結果、群馬県の生糸の輸出量は国内の大部分を占めるまでになった。(この若い経営者とは新井領一郎でその長女が松方正義の長男に嫁いでその娘がライシャワー夫人のハルである。因みに短刀は現在カルフォルニアのハルの子孫である新井家が所蔵している)

1881年(明治14)楢取素彦夫人、寿病没する。  
1882年(明治15)素彦、義妹美和と再婚する。  
1884年(明治17)素彦、群馬県令の職を辞す。

1897年(明治30)素彦、男爵として貴族議員に  
1912年(大正1)素彦、死去、素彦83歳

#### 四、長州藩士吉田松陰、幼少から脱藩まで

伊之助より1年遅れて生まれて来たのが松陰である。杉家は以前萩城下の川島に住んでいたが、火事があり転々とした後、松本村の団子岩と呼ばれる丘の上の家に移った。筆者も訪ねていったが、萩の町が一望できる素晴らしい場所である。登城には不便であつたらう。松陰は移ってから5年経つてから生まれた。幼名は虎之助であるが何回も名前を変えているので、号であつた松陰で統一する。5歳の時、山鹿流兵学師範をもつて毛利家に仕える吉田家の仮養子となり、1年後つまり1835年(天保6)養父没後吉田家を継ぐ。つまり6歳にして兵学師範になる宿命を負う。しかし杉家に同居し、山鹿流免許皆伝であつた叔父、玉木文之進の教えを受ける。甘えや妥協を許さないきわめて厳しいものだったらしい。母、滝はしばしば「逃げればいいものを」と思っていた程であつた。また父百合之助は畑仕事をしながら本をよく読んでいて、手伝いをしていた兄、梅太郎と暗証させられたと言う。

1838年(天保9)8歳にして藩校明倫館の見習教授となり、翌年藩校にて山鹿流兵学を教授し、1840年(天保11)10歳にして、藩候、毛利慶親に山鹿流「武教全書」を朗々と教授し、居並ぶ重臣達を驚愕させたとのことである。その日から「松本村に天才あり」と松陰の名は萩城下に知れ渡つた。1842年(天保13)叔父、玉木文之進、松下村塾を開く。松陰の他兄、梅太郎ら入塾。1845年(弘化2)15歳の時、山田亦介につき、長沼流兵学を学ぶ。翌年、亦介から免許を受ける。1年前から実学を教えて貰っていた山田右衛門から世界地図「坤輿図識(こんよすしき)」を贈られ、その説に感じ外患を憂えて辺防のことを講究する。1847年(弘化4)17歳の時、周防国湯田に遊び、林真人より山鹿流兵学の免許を受ける。翌年18歳の若年にて藩校明倫館の独立師範となる。この頃、杉家も団子岩から現在松陰神社がある清水口へ新居を構えた。大きな家である。

この前後、西洋列強の船が日本近海に現れ、しかもオランダ船からは清国において「アヘン戦争」が始まつたと言う知らせが日本に届いていたので、三方海に囲まれた長州では対外危機感急速に高まつていたと



言える。1849年(嘉永2)19歳の時、海防掛に任命され、藩内の日本海沿岸の防備を調査する。翌年九州遊学のため萩を出発し長崎・平戸・熊本と旅を続け様々の人と出会い見識を深めた。中に平戸藩では葉山佐内、肥後藩では山鹿流兵学者 宮部鼎蔵などがいた。鼎蔵とは10歳も年上ながら国防について意気投合し生涯の親友となる。(後の江戸遊学時に再会し、東北旅行も同行した)。1851年(嘉永4)21歳の時、藩主の参勤交代に従い江戸遊学し、佐久間象山塾に入門する。象山塾には前年訪ねた宮部鼎蔵もいた。会津藩の山本覚馬にも会っている筈である。鼎蔵らと共に東北旅行すべく藩に許可願いを提出し、自費でと言うことだったからか意外と早く許可が出た。一方兄の敵討ちを決意していた盛岡藩脱藩浪人江幡五郎が同行を希望して来た。赤穂浪士が吉良上野介を討った12月15日に高輪の泉岳寺に集まり出発しようと思気投合した。ところが出発の日が近づいているにも拘らず松蔭の関所通過手形(身分証明書)が届かない。藩主不在のため発行できないと言う。あれほど固い約束をした松蔭としては彼らとの約束を破ることは武士の恥と考え、手形を持たずに出発した。脱藩の重罪となる松蔭は15両

と会い、自分を磨いている。江戸について麴町三番町の斎藤弥九郎道場の桂小五郎を訪ねる。桂は明倫館で山鹿流兵学を教えた3歳下の若者であった。象山塾に入る前ゆくり鎌倉見物などしていた。6月3日ペルー率いるアメリカ艦隊が浦賀に来航したということを知り、藩邸で翌日知った松蔭は象山塾に行くことと象山初め塾生は今朝つまり4日の朝浦賀に向かったということだった。松蔭はすぐ身支度を整え浦賀向かって出立した。松蔭が危険視し防備の必要性を訴えてきた西洋列強が今本場に襲来したのだ。心は逸るが船は風の為出ないので旅籠で待つ事にした。残念ながら結果的には路留(みちどめ)になり浦賀に着いたのは夜の10時になつていたので、翌日朝海が一望できる高台に登り象山を見たのは強大な威容を誇る4艘(内蒸気船2艘で船長40間、砲20門)とまた日本側の浦賀周辺の警備態勢は甚だ脆弱でもし戦えば勝算はないと報告している。この浦賀で先発していた象山とも会っている。象山の「先年より船と砲とのこと喧しく申したるに聞かれず、ここに至り大狼狽の体憐れむべし、憐れむべし」と聞き直った意見に対し、松蔭は意外にも「此れにて一へコ(種)締める機会来り申し候。賀すべきも亦大

(今の貨幣価値約150万円)の旅費を用立てた兄梅太郎に「それ大丈夫は誠に一諾を惜しむ。区区の身は惜しむに足らず(自分の身の安全よりも武士として約束を守ることを選んだ)」と手紙を送っている。

会津若松では藩校日新館を訪ね、明倫館の教授として遠く離れた東北にも立派な藩校が存在していることに思うことがあつただろう。このとき日新館の教授であつた山本覚馬が不在であつたのか会っていない。この後新潟 佐渡 青森 岩手 宮城 栃木を巡り四ヶ月余の大旅行であつた。

江戸に着くと、脱藩の罪で帰国命令が出され萩に帰り6ヶ月間自宅謹慎させられ、その後正式に藩籍剥奪・家禄没収・父百合之助「育」(はぐくみ)と言う処分が出される。しかし「10年間の他国修行に出よ」との藩主慶親の特別の許しが出た。慶親は、松蔭が子供の時から講義を聴き続けており、松蔭が如何に優れた学者か知り尽くしていたからである。

## 五. 吉田松陰 第2江戸遊学から死罪まで

1853年(嘉永6)23歳の時、2回目の江戸(諸国)遊学に出発する。江戸に行く途中それぞれ諸国の学者

なり」と報告書を締めている。江戸に帰り藩主に西洋兵制の採用、オランダからの軍艦の購入、日本製の軍艦の建造などの意見書「将及私言」を提出した。

ロシアの動きを知ったアメリカは1854年(安政1)正月早々に変更して再来航したのだ。その頃から仲良くなつた長州の金子重之助と共に海外渡航を希望しペルー艦隊を追って下田に入り、小舟を用意するのに日数がかかったが、なんとかポーハタン号に乗船出来た。(最近わかつたことを記す。この通訳 S・W・ウィリアムスは中国への宣教師の経験もあり、モリソン号事件のモリソン号にも乗船している。後に出てくる新島襄が脱国渡米後大変世話になつたアーモスト大学のシリー教授の親戚筋であつたし、この通訳の弟の長男は新島が卒業時に1年生としてア大で同じ寮に住んでいた)この通訳が出てきてから乗船を拒むことはなく通訳は松蔭の希望を理解したし、松蔭は通訳の立場を理解したのだ。従つて通訳は松蔭の処罰を軽減するよう幕府側の役人に口添えしたように思え、松蔭の処罰を長州藩に任せただけの口添えの効果があつたと思えてならない。従つて松蔭は下船指示に従い小舟も流されていたので岸まで送り届けてもらった。海



岸をうろついでいて役人に見つかると思苦しいと柿崎の名主に事情を告げた。ところが、松陰らしく「功詐を以て過ちを文(かざ)るを恥と為す」の考えで自首したのである。

筆者はまだ読んでいないが、新島襄の一番弟子同志社に学んだ徳富蘇峰が松陰の下田での宿屋の息子から取材した松陰らの姿、行動をまとめた「吉田松陰」があり、新島に献じたとのことである。

実は江戸出発前友達に計画を打ち上げた時、無謀だと反対されていたのだ。最後まで反対したのは熊本藩の友人、宮部鼎蔵である。どう考えても軽率である。松陰には「至誠にして動かざる者は、未だ之れ有らざる也」つまり、誠心誠意説得すると人は分かってもらえると言う考えがあるようだ。金子と共に伝馬町牢獄へ入れられた後、萩へ送還され、松陰は野山獄へ、金子は岩倉獄へ投獄される。金子は劣悪な環境である岩倉獄にて死亡。どれほど松陰は悲しんだであろう。

野山獄と岩倉獄について説明すると1645年(正保2)野山家と岩倉家は道を挟んで向かえ同士であったが殺生沙汰があり、両家取潰されて、野山獄は上牢とし士族、岩倉獄は下牢とし庶民の牢とした向かえ同

獄中 兄梅太郎が差し入れた書物を次々読破し文章もまとめた。特に1855年(安政2)松陰25歳の時に書き上げた「幽囚録」は密航の動機をまとめた大論文である。この変わった新入りに興味を持った囚人たちは、松陰による「孟子」の講義を希望してきたのである。なんと司獄(獄舎長)も正座して参加したのである。その年の終わりには出獄し、自宅にて謹慎となった。自宅でも松陰を勇気付けようと、父百合之助、兄梅太郎他が「孟子」の講義を希望した。玉木文之進から続いたこの塾を継げということを理解し、「以て二先生の後を継ぐ如くんば、敢えて勉めずんばあらざるなり」と記している。家族から近所の人また、色々のツテから次第に入塾者が増えてきた。中谷正亮、後に松陰に情況を知らせた吉田稔磨、松陰の肖像画を描いた松浦松洞それに藩一の秀才と言われた久坂玄瑞らも入塾した。

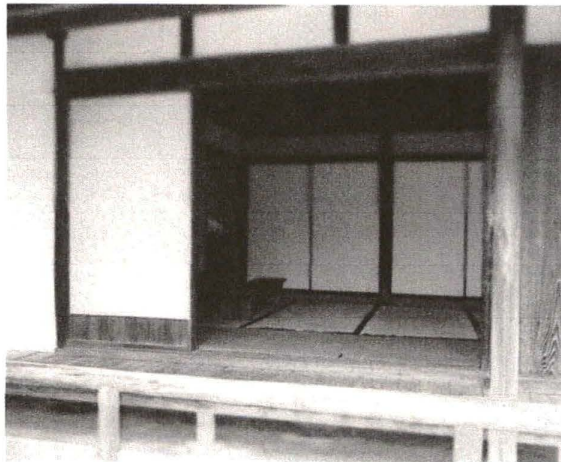
1857年(安政4)松陰27歳のとき、玄瑞と並ぶ秀才と言われた高杉晋作、人物的に優れていると評された品川弥二郎も入塾した。塾生が多くなり塾が手狭になったので、八畳の小屋を改修して塾屋にした。

その年末、松陰の勧めで玄瑞は松陰の妹、文と結婚した。

士の獄であった。野山獄跡の写真を左に示す。



その松下村塾の8畳の間の写真を左に示す。



「その頃の塾生の感想をまとめると、非常に低姿勢で「僕は先生ではありません。一緒に勉強しましょう」



と言ったり、塾生を見送ったりしていたとか。一方忠臣孝子が節義に殉ずる場面などは、声を震わせながら熱涙をこぼす。また逆臣が不埒な行いをする場面では、髪が逆立つほど怒って見せる。ただ字句を淡々と解説するのではなく、こうした感情にこもった講義をすることで、生徒たちを良い意味で感化するのだった

1858年(安政5)松陰28歳のとき、松陰は日本海沿岸の防備を調査したとき気になっていた。現在問題になっている「竹島問題」に対し外国からの占領を恐れ、早期に開拓すべきとの意見書を桂小五郎に託す。桂は幕府に提出するが藩主からの建白書でないことで却下される。(明治政府になって木戸孝允(桂小五郎)は村田蔵六などと動いたが、岩倉使節団での宿題事項に没頭しその件は島根県が引き継いだとのこと。この時の島根県令は佐藤栄作の曾祖父佐藤信寛である。この時から動いておれば今みたいなのはなっていないか) 幕府の通商条約に関しての朝廷をないがしろにした動きに松陰は激を加え、門人を京都江戸に事情を探らせし。門人に対して要人の殺暗殺指示を次々と発信し、門人を困らせた。老中間部詮勝の暗殺計画を前原

取調べを受ける。松陰の罪状は尊王攘夷を唱えた梅田雲浜との関係の問題にしたのだが、松陰はその問題に對しては「輕展に処せられるべき候」と軽い罰だと高杉晋作に報告している。自分のペースで取り調べが進んでいることで油断したのか問題にしていけない、間部詮勝の要撃策について話したのだ。下田で自首した時と同様「功詐を以て、過ちを文(かざ)るを、恥と為す」と考えたのだろう。藩で投獄されたのはこの理由であったので、当然間部問題も吟味されると思っていたのだ。幕府はこの問題は知らなかったのだ。これ以降、伝馬町牢獄に入れられ4ヶ月間入牢していた。「死して不朽の見込みあらば、いつでも死ぬべし」と高杉晋作の問いに答えている。4回目の調べの結果、初めの樂觀視はなくなつて、「とても、生路はなきことと覚悟致し候」と手紙を残している。

10月20日以降、死罪を予想した松陰は、遺書「留魂録」をまとめ、26日書き終える。表題の「留魂録」は次の辞世の歌の「留め置きし大和魂」から名付けたものである。

「身ハたとひ 武蔵の野辺に 朽ちぬとも

留置まし 大和魂」

一誠ら塾生17人が血盟しており、松陰は藩上層部の改革派の周布政之助にまで計画実行の許可を求めている。さすがの藩も放置出来ず、松下村塾閉鎖、松陰は野山獄へ再入獄の命が下つた。ここでも必ず自分の考え方に理解してもらえろと信じているのだった。でも獄にいても、松陰の激しきは変わらず、晋作、玄瑞までが花押した血判書まで出して、松陰を諫めた。

1859年(安政6)松陰29歳のとき、入江兄弟以外には殆ど絶交状までに出し、また母瀧の説得で中断したが、門人たちに反省を求めため、牢獄で絶食まで行っている。幕府、朝廷も藩の武士も当てにならないので、草莽崛起(そうもうくつき民間人の決起)を唱える。

江戸では安政の大獄が始まっており、松陰の存在を問題視するようになって、ついに5月14日、東送命令が出された。野山獄の司獄、福川犀之助は松陰に心酔していたので、江戸へ行く前日、実家に戻し、家族との別れの機会を与えたのである。このことは後で罷免されることになるが、多くの塾生が松陰の下を訪問し、別れを惜しむ。久坂玄瑞の提案で松浦松洞があつた有名な松陰の肖像画を描き、松陰が自賛(添書き)する。

約1ヵ月後江戸の長州桜田藩邸牢屋に入れられ

27日死罪を申し渡され、同日午前10時に刑が執行された。立会人も天晴れな態度だったと残している。

遺体引取りをしたのは桂小五郎、伊藤利助他の4人で、師の変わり果てた姿を見て衝撃を受けたが、体を洗い、髪を整え、桂が自分の襦袢を着せ、伊藤も自分で身なりを整え、大甕に入れ、葬むり大石を置いてその日は帰った。後日、回向院で一番立派な墓石を準備し、建立した。しかし、幕府は松陰だけでなく、倒幕派の志士などの墓をすべて破却した。正直、久坂玄瑞など塾生たちは過激化する松陰に手を焼いていた。しかし高杉晋作が「仇を報い候らわで、安心仕らず候」と書を出すほど、「仇を討つ」の一点で塾生の気持ちは統一された。「死して不朽の見込みあらば、いつでも死ぬべし」生きて大業の見込みあらば、いつでも生きるべし」。松陰は自分が死んでこそ塾生たちが立ち上がる、このこと(倒幕の大業)を期待したと思えてならない。幕府は墓穴を掘つたのだ。松陰になり代って、久坂玄瑞は過激になって塾生をリードしていったが、大業を成し遂げるには未だ時を要する。

次号へ続く